

# イメージの教育

—上原輝男語録に見るその基本的な考え方—

キーワード：イメージの働き、時間・空間・人間、トランスフォーメーション

学習院初等科教諭 長浜 博

## はじめに

児童の言語生態研究会は1968年(昭和43年)に設立された。その設立の趣意には「～～近來、言語活動を重視し言語能力の増進を要望される時運に従い、一見、国語教育の実践と研究は活発さを加えたかに見えますが、国語教育は技能的となり、読み、書き、話し聞く三領域に分轄された言語生活形態の学習を専らとする風潮さえ生んで参りました。われわれは成育しつつある子どもの言語生態を、正確に見届けることを、何よりの国語教育の基礎に据え、そこから出発すべきであります。遅ればせながら、感情・思考及び意識の発達とともにある子どものことばの実態を、調査、研究して、子どもの側からの発言を世に問いたいと思います。～～(一部抜粋)」とある。主宰である上原輝男はすでに世を去ったが、先生の思想と教育観を指標にして、現場の教員中心に今なお活動を続けている。趣意にあるとおり、主に子どもたちの生態を知るための資料取りを中心に行い、毎月の月例会や、授業実践、夏季・冬季の合宿などを通して情報交換をしながら50年余りになる。資料というのは、ある課題で作文を書かせ、その作文から子どもたちの意識の向け方を探ることが多かった。私は、1981年から大学の教育学科で4年間上原輝男に学び、卒業後に研究会に入って今に至る。

今回、先生の語録を作るに当たっては、それらの活動の中で記録した音声をテープ起こししてまとめたものがほとんどである。膨大な資料の中のほんの一部しか紹介できないのが残念だが、私が今回収録したものは、1994年に行われた月例会と夏季合宿(新潟県津南町)の時に記録したテープ起こしから抜粋したものである。先生と共に私たちが目指してきた教育を仮に「イメージの教育」とする。ここに抜粋した先生の言葉は、そのイメージの教育について、基本的な立場や考え方を、私たちに分かりやすく語ったものである。

研究会ではそれまでの20数年間に、子どもたちの感情・思考、意識の発達の問題を「連想と仮想」「『場』の捉

え方」「『うそ』とは何か」「けんか」「なまいき」「個性への接近」などさまざまなテーマで取り上げてきた。そしてその延長として「イメージの停滞と転換」という課題を考えるようになってきていた。特に「イメージの転換」については、子どもたちの生命力の問題、イメージ研究の基層を成す問題として最重要課題になっていた。収録したキーワードに「トランスフォーメーション」という言葉がある。これは、一般的に「変化」「変換」を表す言葉だが、子どものイメージの働きを表す言葉として、ほかに言いようがないため使用している。なお、一部テープ起こしの際に聞き取れなかった箇所を「○○」と表記したこと、また、内容的に削ってよいと判断した箇所に「(略)」と表記したことをお断りしておく。

## 1 イメージの働き

子どものイメージって何だろう。イメージ自体の時間性、空間性というようなものを、この作文資料の中から伺い知りたい。(略) 自分のおなかを痛めた子が片言を口に始めて、そしてものをしゃべり始める…。その時に赤ん坊が持っている頭の中はどうなっているんだろう、どうしてこんなおもしろいこと言うのだろうか、ことさらに言い方をおもしろがせて言っているわけではない。やっぱり頭の中自体がおもしろい世界を持っているんだと思ったはずなんです。お母さんたちみんなそう思っているんだと思う。ところが四年生ぐらいになると、もうただの人になっているんだね。どっかで転換を起こすんだということは、今まで僕は学会でも発表したし、分子と分母がひっくり返るんだと。分子と分母がひっくり返るところが三年生、四年生ぐらいであるんだ、というふうに思うという長年の研究を報告したわけです。だけれども、どこでひっくり返るのか、なぜひっくり返らねばならないのか、そして、ひっくり返った方がいいのか、ひっくり返らない方がいいのか、はまだ何も教育界は答えを出していないんですよ。また出そうとも思っていないんだ。教育界なんてところは、特に学校なんていうところはね、そこは僕はもう苛

立たいくらいの気持ちで思うわけで、そんならこちらが資料を取ってやれ、という気持ちになっているというのが、今やっている研究なんですね。それには、赤ちゃんの段階では、まだ赤ちゃんの知能が成熟していないというようなことを言いたいのではなくて、やっぱり赤ちゃん自身が持っている感覚世界っていうものは現存しているんだというふうに僕は仮定しているわけです。そして分子と分母がひっくり返って、ただの言い方しかできなくなる…。ただの思い方しかできなくなってしまうというふうになるんだけれども、それを成長と言っていいのか、中にはたまたまその赤ちゃんの段階の感覚世界をずっと持ち続けてきているやつが、偶然なんだろうと思うけれども、パッと世の中に出てくる時がある。そして「あれは大変な詩人である。」とかね。「いいセンスである。」とかね。これは幸運児なんだと思うんだ。そういうのはね。ところが大半の者たちは、そんなこと言ったら、「何おまえ、おかしい事言っているのか。」というようなことで、たたきつぶされていってしまうというのが現状なんだ。今なぜこの話を前もってしておくか、というのは、これから読んでくれると思うけれども、四年生の段階で「迷い」があるんだと思う。だから「つぼ!? へえ、つぼなんて課題では今まで作文やらせてくれなかった。」と、ぱっと子どもの感覚、赤ちゃんの時代の感覚がよみがえるということが、いったんはするんだと思う。ところが書き出してみると、そうはもういかないんだね。えらく現実認識の方が先走ってくるということではないかと思う。あるいは、また中には、どっちで書いていいのかわからない子がいると思う。「おとぎ話にしているの? 先生。それじゃまずいの?」「きのうごはん食べていた時に、つぼをわっちゃった…。」という話を書く方がいいのか、「つぼっていったら何かおとぎ話を書きたくっているんだ、ぼく。それを書いちゃまずいんだろうか。」というような段階の子どももいるのではないかと、ということなんだね。だから、そこで学校の先生は交通整理を見事やってやり、こんなこと言ったら実行できないと思うけれども、分かり易く言うために言っているんだけど、「今日あなたたちに書いてもらいたい作文は、あなた達がもし赤ちゃん時代のままで四年生になっているんだとしたら、きっと普通の作文は書かないだろうと思うんだ。赤ちゃんのときにとらえられていたとらえ方でつぼを書いてほしいんだ。」と交通整理をしてやったらね、我々が願うような資料が取れるんだと思う。(略) 技術教育は技術教育でいいんだ。適当な段階においては必要。例えば四年生の段階は、分母と分子がひっくり返る時期であるから必要だと思う。折角分母と分子とひっくり返し

ているのだから、自然な形にしておけば分母と分子をひっくり返した形になっているのだから、そのひっくり返した効能をますます発揮させるような教育というのは、四年生の段階では必要だろうと思う。そういう授業をしてやれば、四年生の段階では、子供達は生き生きしてくる。新知識の獲得ということでは、一年生から六年生の中で最もよく動く時ではないか。三、四年生の時のことを振り返ってみると分かるだろう。それはそれとして、どんどん薄くなり、消え去ろうとしている問題は、これで良いのかということ。それを刺激することが必要なのではないかということ。特に今回の時間性・空間性とかいう問題は、今だかつてひとつも考えられていないから、やろうではないかということだ。それをやってやることによって、子供は絶対助かると思うし、もっと子供の可能性も伸びてくる。(略) 作文の出来不出来を問題にはしない。我々は、文章力というものとはどんなふうに発達していくことが、人間の自然の能力と平行しているのかということをもまだ明らかにしていないのだから、作文の出来不出来など問題にできない。我々の一番やりたいことは、人間の作文能力はどんなふうに発達していくのかということ、それを知るためには、どうしても問題になり、明らかにしなくてはならないのは、イメージの処理を子供はどう扱っているかということの答えだ。

自動車、乗りものということにおいて本人のイメージ世界が広がる。子供の段階だけではなく大人でも新幹線に夢の超特急などと命名する。乗りもの、スピードなどということになると、イメージ世界へ転換していくと言ってもいいだろう。現代人といえども、イメージ世界というものを完全に捨てたというわけではない。学校教育を受けている段階だけが、どっちつかずという格好になってしまっている。信貴山に聖徳太子(厩戸皇子)が馬に乗って笛を吹いている像がある。日本の歴史上の人物で笛を吹くのは牛若丸(義経)と聖徳太子がダブったということになる。なぜ牛若丸と聖徳太子をダブらせたかということ、イメージがダブったとしか言いようがない。時代が違うので結びつくはずがない。ところが、我々のイメージというものは、ちゃんと結びつけてしまう。子どもがきっとイメージ世界を証明してくれると思うから、イメージの研究をやりたい。現実の我々の知識では決して結びつかない。でも結びつけてしまうのは、イメージの働きだということ。文学ができるやつというのは、文学的才能を持っているから小説家になるのだとか考えてはいけな。文学的才能、数学的才能などということは、極めて大雑把な言い方で

あるし、決して明らかにしたということではない。文学的才能というのは、イメージが強いや言わざるを得ないし、あるいは、知恵遅れかも知れない。山下清の才能は幼児思考をしているから出てくる。幼児感覚を残しておいてやれば出てくる。信貴山というのは毘沙門天を祀っている。牛若は毘沙門天を祀る鞍馬に入る。環境は全く同じ。北方守護神を祀る神様である。北方守護神を祀ることが究極の問題である。そうしたら当然ダブってくるということになる。

イメージの時間性、空間性というものの捕まえ方は、記録しておかないと逃げてしまう。感覚が逃げてしまう。捕まえ方が一般の人にはもう分かりにくい。しかし見事に捕まえた。どういうふうにして捕まえるかということ記録しておくことだ。常識を上回るようなものを、人間は、夢の超特急と言う。つまり、それがイメージの時間性なのである。普通現実の意識だったら、「夢の」というのはつかない。だから、あんな物理学の先端に行くようなものにおいてさえも、人間はイメージっていうものを要求されているということになる。となりのクラスの先生は、どういう目的で写真画を描かせるか、ということを知りたいという位になってくる。写真画が描けるというのは技術でしかない。人間が写真画をやるといっても限界がある。限界がある写真画を体得させるためにやっているのです、と言ってくれば、そうですか、それは結構です。と言いますよ。だけど何か写真画に独特の意味があるみたいに思っているというのは、それはおかしい。写真画をやるなんていうことは、子供にとって苦しいことである。半分以上はイメージの世界にいるのに。

人生とは何ぞや、と言った時に、いつからいつまでという、そんなものは期間を言ったにすぎない。人生とは生きている姿を示している時である。生きている姿というのは、今だとしか言いようがない。熊野詣でということは、何か御利益を受けに熊野大社に出掛けていくということとは違う。ただただひたすらにこの道を蟻のように歩いているということ、それが信仰。同じ道を歩いているのだけれども、今日は違ったというものを感じとれるのが道行。それぞれの道行があるということ。

一番大事な事で、これは大人が考えておいてやらなくちゃいけないんだけれども、我々、イメージ、イメージっていう事を問題にしている。それで一体イメージを扱って何をしようとしているのかっていう事。散々僕は言ってきたことだけれど、もう分かってもらえていると思っているけれども、なお念を押すと、やっぱり我々はここで一つの

解決策を持てないやないかなと思う。それは、現実世界に我々は生活しているんですよね。そして先程の上原の人生っていうのは確かに昭和二年から始まって、平成何年間で終わろうとしている。これも間違いのない現実なんだよね。そうすると簡単に言うと、その現実世界ともうひとつの世界と絶えず二つの生活の中を行ったり来たりしながら、人間は生きているんだと思う。我々は小学生の作文指導の中で、あるいは、子どもをとり扱うことで、一番問題にしているイメージっていうものを何でこんなにうるさく言うかという、もう一つの世界、現実世界を生きていくっていうのは、我々は生きている事は現実なんだから、生きていくんだよ、ほっといたって。だけれど、もうひとつの世界は、ここで生きている現実世界の人間達、つまり大人達がもうひとつのイメージの世界をどう処理し、何に価値を見い出して、そして自分自身がどうそれをとり扱おうとしているかということに答えを持っている者が子ども達に接触して責任ある指導をしてやらなくちゃならないって事を僕は言いたいんだ。だからそのためには、我々自身がイメージの世界にどのように対応し、自分がどう処理しているかってことに答えを出しておかなくては。それでないとできる訳ないんだから。その事をもう十分分かっていると思うけれど、再々言ってきたから、今さらに念を押したい事は、「つぼ」と同じですよ、ということなんです。我々は悲しい時、苦勞する時、恥しい事があつたら「穴に入りたい。」と言うのよ。つまりイメージ世界に逃げ込むのよ。つまり人間というものは、大人においても、自分の中に閉じこもるか、あるいは外に発散するか、つぼの内外の問題で生きているということなんだね。つぼの中に入ってつぼにはまったら、じゃあ我々はどれだけの効能があるのかという事をしっかり考えてなくちゃ駄目でしょうね。一番手ぬるいのが学校の先生だから、世の中の人達っていうのは、もう少しはつきりした、そういう事に関しては、はつきりした姿勢を持っているんだよ。学校の先生だけが中ぶらりん、二つ持っている、どっちともつかないところでやっているんだ。どっちかにしてしまうと、何か問題が起きるから。だけれどそれじゃあだめなのね。世の中の人達は結構はつきりしている。そんな甘ったるい事では、世の中生きられないよって人もおるし、そうかと言ってまた、イメージ世界ってのは、それは単なる読み物の世界だよ、という事で、世の中の人達ってのは、現実世界の中で学校の先生以上に読書量が多いよ。電車の中でなんかでもよく読んでるよ。あれ

は、恐ろしく現実世界が夢のない世界にいるからだろうな、なんて僕は思っているけれども。それから本を読まない人は、何とかして一生懸命になって、休みだといったら、丹沢に出かけるとか、あるいは、魚釣りに出かけて行くとかね。涙ぐましい程だよ今。あれはやっぱり現実と夢との世界を行ったり来たりしているんだね。あんなの一番くだらん〇〇だよ。現実がつまらんから、夢を持とう、趣味を持ちましょう、山へ行こう、なんてくだらん、くたびれに行くだけだよって僕なんかは思っている。だけれども我々の仕事ってのは、それに対して答えを出すという事、少なくとも、自分はどう考えるというものを出してやらないと、子どもに指針を与えてやれないもの。それにはね、やっぱり人間のイメージ活動というのがどういう仕組みを持ち、何でそんな二重生活を人間は強いられるのか、ということを考えなくちゃ。しかも我々は坊主じゃないし、医者でもないのね。だから中途半端になってしまう。宗教界だったらね、「宗教の世界では…」とこう言うておられるわけ。「私達の手がけているのは現実の世界の出来事ではないんですから」という事で宗教の世界にパッと逃げておることができるんだ。あるいは、趣味に生きている人達、お花の先生だとか、踊りのお師匠さんとかいるでしょ。ああいう人達は、私達はそういうのと関係ありません。美の世界に生きているからと言って、ごまかしておれるんだよ。だけど学校の先生は、片方は現実世界に足をつつ込んでいなくちゃならないし、片方はそれだけじゃ困るんで、もうひとつ夢の世界を持っていてやらなくちゃいけない。子ども達のために両足がつつ込んでいるから、一番たちが悪くて、一番苦しまなくてはならないんだ。つぼと一緒にだ。それに位置を与えるって事だね。

(平成6(1994)年3月21日

／月例会記録「町田第四小学校」より)

## 2 時間・空間・人間

こんなことは、ぼくはシナリオ書いたり、芝居書いたりしてたから言うわけじゃないんだけど、脚本読んだことあるでしょ。そうしたら一番最初に必ず書いてある。時はいつか、場所はどこか、どういう人物か、時と場所と人物だけは絶対先に設定しなくちゃできないんです。時がない、場所がない、人がいない、これじゃなんにもできないんです。だからぼくが言いたいのはね、そういう約束になっていますっていうことを言いたいんじゃないのよ、今は。つまり、我々の意識の設定をするときに、時、場所、人という約束ごとを戯曲は今まで持っていたということに対する反省なんだよ。ぼくが知りたいことは、教育者が知

りたいことは 人間を形作っている要素として、時間と空間とそれから人間と、この三つというものをどこで自覚するんだろうということなんです。だから我々が世界だとか、人間意識だとか言うてるのは、必ず時間と空間と人間とって、それをちゃんとこの三つの間っていう言葉で言い表しているんだってこと、忘れちゃならないんだ。そして人間が成長する中で、どっかでつかまえていくの、それは。ああそうか、時間も「間」とついてるし、空間も「間」とついてる。人間だけはなんでか知らないけど、「かん」と言わずに「にんげん」と言っているんだなあって。どうして、っていうようなことを思いつくんだよ。なあに、あれは「じんかん」が正しかったんだよ。ところが今や人間っていうのは、分からなくなったもんだから、人間っていうのは人体を差して人間だなんて考えるようになってしまった。これは墮落している証拠。イメージカがなくなりつつあるってことだよ。自分のこと「にんげん」なんて言うからいけない。人間関係を「にんげん」と言っているんだから、そうしないと我々の意識というのは落ちつかないんですよ。だから先程の話の尻馬に乗ったように言うと、それは場面を動かすというのは、次を持ってきさえすれば場面が動くんだから。どうしても駄目な場合は人間を殺すか、飛び出させるかすれば、もう変わる。だから、芝居でも映画でも見てて、あ、こんなところに偶然飛び込ませたな、作者苦しんでいるんだなっていうのがある。分かっている者から見れば。これもまた人間おもしろいことに、人間の知恵っていうのは、偶然、必然なんて言葉を少なくとも教養ある人間たちは知っているんだよ。どこで必然、どこで偶然なんて言葉を、人間は見つけたんだろうか。一番最初に見つけたのは大変な哲学者だよ、これは。ところが後のやつはそんなことの学習ばかりするから、必然、偶然という言葉を知っていても、必然、偶然の本当のおもしろさは知らない。大学教育を受けていても、人間を生きる、人間を生かせるために大学教育を受けているんだっていうような意識が乏しくなっている。資格をとるためとか、専門学校でしかなくなってきたから、だんだんだんだん駄目になってきた。だから文科系の大学ですべきことは何かっていうのは、それは哲学であることだ。哲学が学問の中心に置かれていた時代は素晴らしかったということなんだよ。感覚的にさえ昔の人に比べてもう我々は駄目になってきている。それは偶然、必然っていう面に対しての思いがフレッシュじゃなくなったからね。「このことは偶然なんだ。」そう思えなくなった。あるいは「このことは必然なんだ。」っていうふうに思えなくなったの。人と人が出会っても、「ありがたいこ

とですね。」っていうふうに言わなくなりました。「あなたお久しぶりですね。」って言わなくなってるもの、実際に。そして、「おかげ様よね。」って言わなくなった。そこにいくと、日本人は素晴らしかったっていうことが言えるのね。「お達者、よくまあ生きていたね。」って、こういうようなことをついこの間まで言っていた。だから今はもう生き死にの問題でも、あまりびっくりにしないのね。ああ、死んだ、そう、それでしまいじゃないか。香典いくら出すの、なんて、そんなことだけになってしまってる。ごみみたいなもんだね、今の生き方なんて。損だよこれ。もっとやっばり、今年の兎言態はこれだけっていう、これだけの人間がなぜ顔を合わせたのかっていうことが不思議だなんて思わなきゃ駄目だね。会うということが。そしてどこかで、とにかく今の教育は、覚えさせるってことだけはするから、教育の最初は会うことであるって知ってるんだけど、その大切さは知らん。

やっぱり生きていくってことはどういうことなのかっていうことのね、よって立つべきところがやっぱり大事なんだと思う。みんなそれぞれが、そのところどころがしっかり、私は、ここで私の命は立っているんだっていう、それをつかまないと。そのために我々はそれを知りたいから児童の言語生態研究なんてやっているんだから。人間の意識というのはどんなふうな構造をしているんだろうということだよ。どんなしくみがあるのか。今までの例をとってきて、時と場所と人と、という三本立てでもって我々は意識を解こうとしてきたんだということだね。そうだとすると、時と所と人と、という三要素は絶対考えていなければならない。子どもは子どもなりに考えているんだということだね。そしてお釈迦さんだって、それ考えたんだよね。お釈迦さんだって考えて難しかったから、ついに「因縁」と言うんだろ。うまいよ、これは。これはうまいぜ。因縁なんだって。Fが今度赴任した、こういうへんてこな場所に、これだけの人が来たっていうのは、何かの因縁なんだって。しかも仏さんの考え方は前世からの約束事であったって、こういうんだから実に楽しいよ。やはり仏さんの考え方っていうのはすごいよ。それは大きいしね。前世からっていうんだから、時のつかまえ方が違う。そう考えていけば分かるだろ。だから仏陀だってイメージネーションを考えていたって、こう言えるわけだよ。そして癪じゃないか。仏さんが考えた時代のやつをまだ今だにこんなこととしてさ、それを拝んでいるんだもんね。ちょっと待ってくれて、何か新しい仏像の形でも、こちら考えてあげたいよって、君ら思わないの？

(平成6(1994)年8月8日～11日)

／夏季合宿「新潟県津南町立大赤沢小」より

### 3 トランスフォーメーション

我々のイメージっていうのは一体正体は何だろうか、と思うことだ。ストレートなものはイメージとは言わない。直接的なものではない。言葉はよくないかも知れないけれども、直接的なものではない。間接的なもの。版画を出したのは、結局、裏がえしたその世界だということ。だから裏がえせばイメージになってしまう。だから何年か前、これはもう使って大丈夫だっていうふうに思って、案外そうでないように見えて、言葉を選ぶことにおいてはえらく慎重だから、何年か前にやっと、日の目を浴びさせた「トランスフォーメーション」という言葉を使い出した。イメージというのはトランスフォーメーションを起こしたということ。変換・変革させるということが絶対大事なのだという。変換、変革が起こったら、もう小学生なんていうものはいちころだ。変革・変換さえ起こしてやりさえすれば、子どもたちはパアッと世界が広がる。顔つきが変わってくる。一番簡単なのは体操ででんぐりがえさせただって大喜びしている。あれは何？ 身体そのものにトランスフォーメーションを起こす。子どもたちなんていうのは、倒立する、逆立ちする……あれは、ひっくり返るから。立てたか立てないか、そんなことばかり体操の先生はやっている。そんなことではなくイメージ世界へ引きずり込んでいくということだ。

(平成6(1994)年3月21日)

／月例会記録「町田第四小学校」より

今人間の意識の問題を話しているわけでしょ。じゃあ、「人間の意識にとって物とは何か」という考え方を入れておかないからだ。小道具っていうのは世界を構成するための最小単位なんだよ。だから小道具が生きていない芝居ほどおもしろくないものはないのよ。小道具、大道具を生かした芝居になってくればおもしろいんだよ。実は時、場所、人なんだけれども、時・場所・人の一番動くのは何かっていうと、大道具と小道具。だってこう見えてもぼくは演出研究所にいたんだから。威張っているようだけでも、本当に世の中の人って素直だよ。でもそれは、ある勉強をした者達だけが知っているんじゃないって、みんな知っているんですよ。人間は直観ってものを持っているから。だから恋しい人がいたら、何かその人にプレゼントしたいって気持ちが起るの。物に替えるのね。物に替えるというのは、もうトランスフォーメーション起こそう

とするわけよ。(略)そうしたらさあ、もらった物がばかって壊れるだろ。そしたら、あの人に何か不時が起こったのではないかって思ってくれるから、人間っておかしいじゃないか。(略)だから自分の作ったイメージの中に自分を閉じ込めていって、閉じ込めるか何か知らないけど、それでよしとしていくわけでしょ。いつでもそうよ、所詮は。

命を持たされたってことは、この器の中に何かが入っているんだからね、確かに。だってそうだろう。この機械が止まったから、死んでしまったってことは、何も死んでないものね。使おうとしてるんだもの、今。まったく取り出せないのは人間の霊魂と命だけだろ。そうすると現代の科学で取り出せないのは霊魂だけだとすると、少なくともその霊魂が入っているんだから、その霊魂をもう少し上手に使わなくちゃ損じゃないか、ある間に。(略)だって、トランスフォーメーション起せる人間の方が楽しいに決まっているんだったら、起こさせてやらなきゃかわいそうだよ。まだ可能性持ってるんだもん。

僕自身正直に告白するとね、弱くなってるなあって気がしてるのよ。僕は子どものときのことと思うと、イメージカが弱くなっているなあと思う。僕は子どもの頃にはねえ、笑われるかもしれないけど、ぼくにイメージが湧いてくるとね、体が震えたよ。体が震えるのが僕はよく分かった。ガタガタ、こんなことじゃないのよ。だけでも震えるっていうのが僕にはあったしね。つまり何か「もののけ」が乗り移るっていうのが分かる人間だったのよ。だから小さい時から本をたくさん読んだということもあるけれどもね。本を読んだからではないのよ。だからぼくはね、子どもの時とはとにかくうんと本を読ましなさいとかね、あれ、好きじゃないの。あれはね、本が読みたい子はね、本を次々読むから本が読めるようになる、そんなことじゃないの。持ってんだって、もうすでに。そしてね、本が好きな子はね、ページをめくる前に次のページが分かるのね。(略)次こうなるっていうのが分かるんだもの。だからそれがもっと発達してくればね、こうやって手で押さえただけで、本の中に何が書いているか分かるようになるに決まっているもの。ぼくはやれなかったけれどね。それは、そんなことやろうとも思わなかったけれども。開ける前に。そして、なんで体が震えたりするかっていうの。こうなるんだろうと思って、こう開いたら、ぱっとそうなっていたら、ほら見ろって言うたくなるさ。ありゃっ！というふうになるよ。どうしてこれが自分で分かるんだろうってなるでしょ。だからそういう意味ではね、子どもの時の方がずっとすごかったなってい

うふうに思う。それがぼけてきてるっていうふうに思う。

(略)だからそういうことから言うと、今駄目になってる。でもまあ駄目になっているだけに、代わりって言っちゃあ変だけれども、何か形があるっていうふうには思えるようになってきてるのね。その形を取り出せれば、もっとはつきり誰でもつかまえていくことができる。だから少なくとも、あの四つの仮説のところまではやれたんだから、イメージ運動は、あの四つの仮説とあと一つ、そこまではできているんだから、もう少し先を考えたらどうだろう。

(K)さっきの話にもどるんですけど、あの四つの仮説っていうのは、トランスフォーメーションとしてあるんですか。

全体的にはそう。それでないとあれにならないもん。たとえば邂逅の喜びなんてね。邂逅したときに、めぐりあったときに、なぜ人間はあれほど興奮するのかって説明できなくなる。あなた、三年目にあなたとお会いしたんですよ、なんて、それでしまいになるはずなのに。よかったなんて言うじゃないか。だからおそらくそれはトランスフォーメーション、転換したっていうことを思うから、だから、肉体的に子どもがでんぐりがえしを喜ぶのと同じようなものだ。

(N)簡単に言うとあれなのかしらね。常識がくつがえされたっていうときにトランスフォーメーションを起こすのかしらね。

そうだよ。なにしろ常識を早く作りすぎるのがいけない。だからぼくなんか常識派じゃないから。まず常識派をつぶさなくてはいけない。つぶすのは簡単だよ。ぼくなんか絶対常識について行かないもんね。なんとしても、もう意地でもついていかないもん。ついて行こうともしない。だって原爆を見ている人間がなんで常識になんてついて行ける。だから何度も繰り返すようだけど、みんなこの話を信用してくれないんだよ。こうやってるけど、次の瞬間、あつと言ったら、もうこれ消えるんだよって。それを僕は見てしまった。ところが何度もこの話をするんだけど、この話にはあんまり感動しないんだ。まあ、もっともスクーリング中だよ。玉川のスクーリングで8月6日がはさまる時は、しょうがないからこの話をする、聞いてる奴でだいたいひっくり返る奴がいたもんね。気分が悪くなって倒れるとかね。これは間違いないことなんだ、全員がしろ一つとして聞いていることはできない。だからそういう気



分が悪くなった人なんていうのは、トランスフォーメーション起こし得るんだよ。

人形を見せるとトランスフォーメーションを起こして、火事へたどるとというのが問題なんで、その転換が問題なんだから。だから他の子は、人形を見せたら、他の何かトランスフォーメーションを起こすんだよ。最も起こしやすい小道具としては人形なんだよ。人類ってものは、それはもう決まってるんだよ。我々と同じ形しているだろ、人形っていうのは。それを小さくするかでかくするだけのことなんだから。だから日本の神様見たら分かるよ。手の上に乗るような小人のような神様と、そうするとまた逆に大入道のような大人形っていう、これも神様なんだ。だからガリバー旅行記だって、なんにもそんなにびっくりすることはない。おもしろいのは何かっていうと、ガリバー旅行記の巨人と小人が出るということがおもしろい。拡大と縮小ね。(略)英才児の条件の中の一つ、地図に興味を持つ。地図っていうのは一番トランスフォーメーション、否応なしに起こさなくちゃ読めないんだから、そうだろ。だからそれこそ、常識的にもっと考えてもいいんだよ。我々の周りには、必ずそのトランスフォーメーションを起こす生活経験のようなものを持っているんだから。それをそうだっていうふうに思わないところがまずいと思う。たとえば地図なんかだって、もっともっと使わなくちゃ駄目なんだと思う。うちのチビなんか、ぼくがよく地図を見るものだから、地図の見方を知ってきたよね、最近ね。おもしろいらしい。(略)世の中に適応させようとする教育程つまらん教育はないってことだ。それはいらないっていうことなんだ。じゃまにこそなっても、なんにもそんなもの生きていけないんだもの。

我々がつかまえたいのは、「もしも」という仮定の状況における、その子に対応の仕方を問題にしているんじゃないんだからね。間違えないようにしなければならないのは、「もし」という仮定への転換を言っているだけなんだから。だから、「もし」っていうふうにすぐ出る修練をしておこうっていうわけよ。ところが学校の先生は、もしこういう場合には、あなたどうしますか、なんていう。どうしますかっていう対応の方ばかり聞くんだよ。それは現実対応だろ。児童言態は人間の生態を聞くだけなんで、あるべき姿を求めてるって言っても、そういう現実対応の仕方を問題にしているわけではないので、意識がどう動くかっていうことだけを、意識の柔軟性とかね、意識が固定するから常識が生まれてしまう。意識がもっと柔軟に縦横に動くこと

をイメージというわけでしょ。(略)トロがそうだったじゃないか。もしもお母さんがなくなったらって、ワーって泣き出す。上手につかまえていたよね。だからああいうふうにはイメージが展開し出すと、もう抑えがたいのね、子どもは。それは知的な展開よりイメージ力。あれがイメージ力なのね。子どもにとって、あれがバイタリティなんだから。だからそれが動き始めるっていうことになれば、それがいい方向で動き始めるようになれば、こんな強いものはないってことです。現実対応の仕方ではないんだっていうこと。大事なのは、そのイメージ力がどう出るかっていうことなので、一つのものが出始めたら、だれがなんと言おうがダーツと止まらないというのが、人間の持っている自分自身のものだから。命だもの。

(平成6(1994)年8月8日～11日)

／夏季合宿「新潟県津南町立大赤沢小」より

## 解題

先生は、「～親から子へ、子から親への、個人を超える継承的生命を想わない限り、日本人の生命観は衰耗し破綻する。～我々は、事大主義でも民族主義でもない。ただひたすらに、いのちの在りようを求め続けることが、教育の尊厳性をつなぎ止める残された道であろうと信じるばかりである。～」(1993年「いのちの教育を再び」明治図書)と述べ、生命の尊厳の問題として、本来大切にしてきた日本人の縦横の人間同士のつながりをないがしろにする戦後の個人主義的思考方に疑問を投げかけ、それが戦後日本の教育を蝕んできたことに警鐘を鳴らした。一つの「生」は何千年にもわたる長い歴史と、数限りない「生」のつながりにおいて成り立っている。先生は、「子どもはイメージの世界に生きていること」「イメージの問題というのは感覚の問題であること」「知識や技能を身に着けるよりも体感やセンスを磨くことが大切であること」「日本人が古来どんな感覚を維持してきたのか知ることが大切なこと」を、私たちに説き続けてきた。そして特に幼少期と児童期の子どもたちを担当する者にとつては、この考え方を矜持とすべきことを訴え続けてきた。

「(大事なのは)経験に先立つ教育だよ。簡単にいうと、人間は経験を持たなかったら何もできないなんていうことではないんで、経験以前においてできるんだよ。我々の体の中には、無意識で親の考え方が入ってきているんだから。それを我々は引き出さなくてはならないんだと思う。(中略)世の中が使っているような言葉でいうならば、潜在意識ということでしょうね。上原独自の言い方です

れば、それは意識っていうのは、無意識伝承っていうのがあるのね。無意識の伝承っていうのがある。無意識っていうのは意識がないのではない。無意識と言う意識なんだ。」(1994 年児童の言語生態研究会月例会)

先生は、この無意識伝承について生涯をかけて研究を続け、私たちはそれを「イメージの研究」と言ってきた。私が大学4年の時に「先生が学問をやる目的は何ですか？」と聞いたことがある。その時先生が即座に「生命の神秘を解き明かすことだよ。」とおっしゃったことが、今も脳裏に焼き付いている。先生の著書や話はとても難しくとつきにくい、何か心に響いてくる。本物だと感じる。それは、先生の言葉を頭で理解できるかできないかという問題以前に、すでにその言葉で私の心のずっと奥の方(無自覚の意識)が反応しているからだと思う。先生がゼミの学生に卒業時に送ってくれる言葉がある。その言葉は、その学生自身のことを先生なりに解釈した言葉なのだが、私に送られた言葉は「初志貫徹」。「長浜は優等生だから、何かが分かってから次に進もうとする。でもそんなことをやっていたら、一生かかっても終わらないよ。」。先生の言葉は、歯に衣着せず辛辣だが、胸に響く。

子ども(人間)の生命について関心を持ち、その本当(神秘)を求めずして教育は語れない。そのことを、先生は何度も何度も繰り返して口酸っぱく私たちに説き続けてきた。私は、とうとうその本物を求めて大学卒業後も小学校教員を続けながら、先生が主宰する「児童の言語生態研究会」で勉強を続けることにした。先生が次のように語ったことがある。最初の二つは、当時大学3年生の私が先生と一緒にいった研修旅行の時のものである。

「教育、教育って言っているけれども、結局君達の人間の問題だから。「私」って何だろうかっていうことを言っているのと同じことなんだから。その問題とつながるから、僕は大変身近な問題だと思うんだよね。私がここに存在しているということはどういうことなんだろう、私がものを考えているということはどういうことなんだろう、ということを問い直していることと同じなんだ。」(1983 年 玉川大学 上原ゼミ研修旅行 埼玉県秩父三峰神社)

「教育学をやっている人達は、何て言ったって生命の誕生ほど人間を感激させるものはありませんっていうところから教育学の第一ページを書かなければならないんだよ。この問題を取り扱うのが教育学ですって言わなけれ

ばいけないんだよ。生命の神秘を語ることに尽きるんだっていうことだよ、教育学は。学校の先生になる一番根本は何かって言うと生命と関わろうとする人達だっていうことですよ。」(同上)

「～～教育者は百姓しなくちゃ教育の本当の面白さは分かん。～だって作物植えるわけでしょ。それ育てるわけだから、まったく同じだなと。～～」(1994 年児童の言語生態研究会月例会)

今教育現場では、「生きる力」を育むための「主体的・対話的で深い学び」という言葉を旗印に教育改革を進めている。しかし現実には、全国学力学習調査の結果に一喜一憂している。残念ながら、どんな理想的な言葉を旗印にしても、現場では、往々にして効率よく短期間で教育効果を生むための「経験主義」と「能力主義」が主流となり、知識の詰め込みや技能の修練が中心となってしまうことを否めない。

教育は、一朝一夕に結果が出るものではない。また、機械がプログラミングされたとおりに動くように、教わった人間が教わったとおりに行動するとは限らない。それは、人間が感情・思考、意識の発達とともに成長するものだからだ。ここに記録した先生の言葉が、少しでも多くの人たちの無自覚の意識を刺激することを願いたい。